



嫉妬と独占欲

箱庭の楽園  
画 夏目青

# 目次

第一章 幸せな日々

第二章 忍び寄る肉食女子

第三章 寸止めな日々

第四章 誕生日の夜は甘く激しく

第五章 二人の秘め事

## 第一章 幸せな日々

涼と暮らしてから二年が経ち、まゆは大学生となり二十歳の誕生日が近くなっていた。

今日は二十歳を祝う会の記念撮影のための振袖を選びに老舗の呉服屋に来ていた。

あらかじめ値段を調べると目が飛び出そうな高級店だったが、涼は涼しい顔をしている。

稼いでいるのはなんとなく知っているが、まゆとしては安い着物をレン

タルすれば十分と思ったが、これから友達の結婚式などでも使えるからと涼に購入を勧められたのだった。

「うーん。どれも似合うね」

「そうですねえ。かわいらしいからどれも似合います」

老舗の着物屋さんで、女将と涼がまゆの振袖姿を真剣に眺めていた。まゆは値段が気になって仕方がないが、女将さんは涼を上客と見込んだらしく、高そうな帯などをどんどん持ってくる。

「りよ、涼くん。値段聞いてないけど、多分これすごい高いよ？」

「いいよ、別に。一番気に入ったの選べば」

「でも……」

上等そうな生地<sup>ニ</sup>に氣後れして選<sup>ビ</sup>びかねる。

まゆのバイト代では絶対に買えない値段なのは間違いない。

「レンタルでいいんじゃないかな……」

店員に聞こえないようこそつと伝える。

「これから友達の結婚式とかでも着れるし、一生の思い出だからさ」

中年の女性店員は、涼が金に糸目をつけないタイプと判断したようで、

さらなる高級着物を持ってきた。

「これなんかどうです？　最高級の絹で作られた西陣織です。今の時代手に入れるのは大変な品物ですわよ」

「わあ。すっごい素敵……」

それまで値段が気になって、楽しめなかったが、その着物は知識のないまゆが見てもとても素敵だった。

深みのある朱色の生地到大輪の牡丹と鶴が描かれている。

「これに、この帯……すごくいいでしょう？　振袖を引き立ててくれます

よ」

「わあ……」

西陣織で金色に七宝文様が織り込まれた華やかなもので、着物と合わせると一層互いの美しさが引き立つように見えた。

組み合わせも秀逸で、見とれてしまった。着物など知らないまゆにもその素晴らしさはわかる。

「それでいいんじゃない？　すごく似合いそう」

「ありがとうございます」

値段も見ずに涼が即決する。まゆは値段が気になって落ち着かないが、涼は全く気にしていない。

——一体いくらなんだろう。怖い。

涼が外資系金融機関で普通ではないくらい稼いでいるのは知っているが、だからと言って当たり前前に払わせるのは気が引ける。

普段は時給千円ちょっとでアルバイトをしながら、そろそろ就職も考え出している身としては、気になるところだ。



注文してから、帰り道に聞いてみた。

「ね……。あんな高い着物、買ってもらっていいの？」

「うん。だって似合ってたし、いい買い物できたと思う」

まゆの母親は、もともとあまり関心がないようで、誕生日なども仕事優先で祝ってもらった記憶があまりない。二十歳の集いのことも忘れているかもしれない。

こうして親代わりにしても有り余るほど、涼には気にかけてもらっている。

好意をすんなり受け入れられないのは、もしも将来別れてしまった時に自分が耐えられないからだ。

2年前に義理の兄と妹という関係から恋人になり、一緒に暮らして大好きな気持ちは変わらないけれど、なまじ家族でもあるから、溺れ過ぎないように冷静な自分も残しておきたい――。

「まゆちゃんさ、また余計なこと考えてない？」

「……着物は嬉しいけど、甘え過ぎたくないっていうか。なるべくバイト代で自分のことは賄いたいなって」

「まゆちゃんを甘やかすくらいしか、稼ぐモチベーションもないんだよね。マンションとか車ももう買っちゃったしなあ」

まゆの大学入学を機に涼は二人で住むマンションを買ってしまった。分不相応な暮らしに戸惑うものの、実家の両親も娘が巣立って気楽な二人暮らしを始めてしまったので帰るに帰れない。

涼の仕事のことはよくわからないけれど、激務なのは間違いない、しょっちゅう海外出張もある。

「言ったでしょ？　ちゃんと受け取ってもらえたら僕も嬉しいんだって」

「うん。ありがとう」

肩を抱かれ、耳元で囁かれる。

翌朝、スマホの着信音で目を覚ますと涼からだった。

前日もベッドでつい盛り上がってしまい、起きると涼は出社済みだった。

一人で朝食を食べていると、涼から電話があった。

「まゆちゃん、手帳をデスクの上に忘れたから、ちょっと今日の予定見てください？」

「うん。えっと、十六時半から会議ってあるよ」

「ありがとう」

手帳をしまおうとすると、紙がはらりと落ちた。

「え……これ給与明細？」

その数字が目に入り驚く。

「え……!? 月給? 年収じゃなくて？」

まゆの想像をはるかに超える金額に腰を抜かしそうになる。

——み、見なかったことにしよう。

世の中あまり景気のいい話は聞かないが、別世界も存在するということを学んだのだった。

しかし、変態とはいえ顔よし経済力ありまくりの涼が選んだのが、地味で取り柄のないまゆというのがいまだに謎ではある。

いつになったら、胸を張って涼の恋人だと世間に言えるのか。

涼と暮らし初めて今年で三年目になるが、異常な過保護と溺愛は変わらなかった。

ただ家族でもあるという複雑さから、周囲に関係を打ち明けていない。

大学に着くと、すぐに友達に声をかけられた。

「ねえ、これまゆのお兄さんじゃない？」

大学の講義の前に、友達からスマホでテレビの討論番組のネット配信を見せられた。写真には涼が確かに映っていた。

「ほんとだ。なんで出てるんだろう」

特にそんな話は聞いていない。

「なんか外資系で働く日本人にインタビューだって」

動画を見ると、アイドルや芸能人に囲まれている涼がいた。

「すごい人なんだね。お兄さん。隣の俳優よりかっこいいじゃん」

「私も仕事のことはよく知らなくて」

激務でしょっちゅう海外に行ったりもしているが、詳しい仕事の話は聞  
いていない。

まゆは友達の間では、万年彼氏なしのかわいそうな人扱いだった。

画面の中では涼が、仕事モードの顔をしてしゃべっている。

「では、涼さん。今後日本人が海外で活躍するための条件は？」



今人気上昇中の女子アナ・如月アズサがたずねる。

「そうですね……やはり日本人は失敗を避けようとする傾向があるので、まずは失敗したら喜ぶくらいのマインドでいるほうが、色々なことに挑戦できると思います。才能というのは、失敗しても続ける図太さだと思えますね」

画面の中の涼は、自分の知ってる人とは別人みたいだった。家ではまゆに甘々だが、仕事では厳しいタイプなのは想像していたが。

その後も的確なコメントをし、一緒に出ている有識者達も感心している

様子だった。

実際にすると自分の知らない一面があることに寂しくなる。

——涼くんって仕事だとこんな感じなのか……。

新鮮な反面、少し遠くに感じてしまう。

「えー如月アナ、目がハートになってるよ。狙ってない？」

「ま、まさか……！」

そう思いつつ確かに視線が熱い。

「涼さんのことすっごい素敵って。これロックオンしてない？」

確かに涼は顔も体型もモデルになってもおかしくないくらいカッコいいし、おまけに学歴もあって、仕事でも相当稼いでいる。

——女子アナが狙ってもおかしくない……。

というか世の中の全女子が狙ってもおかしくない。

「まゆのお兄さん、スペックすごすぎん？」

「そ、そうかな……」

「まゆに彼氏ができない理由がわかったわ。こんな人が家族にいたら、誰を見ても魅力的に見えないわけだ」

「まゆ、一生独身かもね」

「ええーっ、そんな」

確かに昔は涼が好きな気持ちを抑えて、他の人と付き合ったりもした。

それがきっかけで涼と男女の仲になってしまったわけだが、今でも釣り合わないのはわかっている。

普段はただの変態に見える時もあるが、客観的に見ると確かにハイスぺイケメンで間違いない。友達の言葉を聞いて、なぜ涼がまゆを選んだのか、さらにわからなくなった。

今も涼の所有する高級マンションで至れり尽くせりの溺愛生活を送っているわけだが、いつ涼の気が変わるのかと心配になることもある。

夜になって、帰宅した涼に番組のことを聞いてみた。

「ねえ……涼くん、テレビに出たんだった？ 友達が見せてくれたよ」

「あーあれね。くだらない番組だったでしょ」

「如月さんって、キレイだね」

「誰それ？」

「一緒に番組に出た女子アナさん」

「そういえばいたかも」

涼は大して興味のなさそうな顔をしていたが、番組放送後に如月アナがSNSで涼を褒めちぎる投稿をしていたため、一部の男性ファンが不快感を示し、軽く炎上していたのだった。

その他、番組を見た視聴者が涼の顔をスクショして投稿し、イケメンエリートとして盛大にバズっていた。

「涼くん、芸能人に囲まれても遜色なかった」

「なに？　どしたの？」

「だって……画面越しに見たらカッコいいの再確認しちゃったんだもん」

「んー。まゆちゃんしか興味ないの知ってるでしょ？」

肩を抱かれ、頬に軽くキスされる。

「いつまで彼氏いないって、友達に隠すの？」

「だって……」

「僕は大切な人がいるって周りには言ってるけど？　まゆちゃんはまだ秘

密にしたい？」

血が繋がっていなくても、今も義兄妹なわけだから、恋人になるというのは普通ではない。だからまだ二人の関係は両親も友達も知らなかった。

「家族でもあるから色々複雑なんだよ。一般的には変なことだし……」

「周りの目が気になる？」

もしも今後別れたとしても、家族であることは変わらない。別れたあとに涼が他の人と結婚したりしても、ずっと関係が続くと思うと耐えられない——まゆの母と涼の父は多分不倫で始まった関係だし、基本的にまゆは人間不信なところがある。



「なんかネガティブ妄想モードに入ってない？」

「え、なんでわかるの」

「顔に書いてある。今日はずっとこうしてよっか。まゆちゃんの不安が収まるまで」

ソファで後ろからハグされ、少し気持ちが和らぐ。

「涼くんはなんでもできるから、私の気持ちわかんないよ」

涼がなにか言おうとすると、テーブルに置いてある涼のスマホが鳴り出した。涼は無視してまゆの首筋に顔を埋めている。

「電話だよ」

「大した用じゃないよ。まゆちゃんのが大事」

「で、でも仕事の急用とか」

一度鳴り終わったが、再び電話が来る。

「うるさいな。電源切ってくる」

テーブルにあるスマホを取りに行った涼が、電源を切ろうとしたが、着信相手の名前がまゆの目に入る。まさに話題の如月アナだった。

「出た方がいいよ」

しぶしぶ涼が電話に出ると、よく通るキレイな声がまゆにも聞こえてきた。

——声質ひとつとっても一般人とは違うんだ。

「涼さん？ 先日はありがとうございました！ 実は番組の評判がすごくよくて、ぜひまた来て欲しいんです」

「いやー、自分は意見できるほど経験もないので」

涼が断ろうとすると、如月アナが畳みかける声が聞こえてきた。

「今の若い子って、希望がないんですよ。頑張っても暮らしがよくならな

いから、最初から頑張らないって子が増えてるんです。だから涼さんがモデルになって、能力があればこんな生き方もあるんだって示せたらいいと思うんです」

「いや、人の生き方に影響与えられるほど立派に生きてないので」

押し問答が延々と続き、電話が終わった。

最後のほうは、どうしても会って話がしたいということだった。

「あの女子アナさん、涼くんのことかっこいいとかSNSに書いてプチ炎上してるんだって……」

「不機嫌の理由、まさかそれ？」

「……なんか疲れて頭痛いから今日は寝るね」

一人で寝室に入ると、涼も追いかけてくる。

後ろから抱きついてくる涼を無視し、寝たふりを決め込んだ。

別に疑ってるわけではないけれど、なにか面白くない。傷ついている自分がいる。

寝たふりを続けながら、気づいてしまう。

——結局私って自信がないんだ。だからいくら好き好き言われても、不

安になっちゃう。

翌日、仕事に行く涼はまゆの機嫌を取ろうと必死だったが、まゆの心は虚ろだった。涼が出社したあと、実家に行くことにした。

「まゆ、お帰り」

数ヶ月ぶりに実家に帰ると、母親はどこか疲れた顔をしていた。

「お母さん、具合でも悪いの？」

母にそう尋ねると、

「年齢的なものもあるかもしれないんだけど、ちょっと最近体調が悪くて仕事やめちゃったの」

元祖バリキヤリみたいな母だったから驚いた。ずっと一緒に暮らしてはいたが、帰りは深夜で、休日出勤も多く、あまり家族としての思い出はなかった。

そのせいか、まゆはどこか母親に対して他人行儀になってしまふところがある。

「えっ。大丈夫なの？」

「今すぐどうこうなるわけじゃないけれど、ちょっと仕事を続けるには厳しい感じなの」

聞けば命に関わるほどではないが、病気をしたので、今後は家で療養するらしい。

「今まで走りすぎたなって。家庭も省みなかったし……。まゆにも構ってあげられなかったなって反省してる」

いつになく殊勝な母親の態度に、驚く。

「実は涼くんから、まゆの学費は自分が払うからって言われて甘えちゃっ



てるの」

知らなかった事実を聞かされ、驚いた。

「え、じゃあ涼くんが払ってるの？」

「ごめんね。まゆ。お父さんにまゆの費用は頼みづらくて」

昔から母は父親にまゆが連れ子であることで気を使っている。だからと  
いって涼に払ってもらうのは悪い。

「自分で教育ローンか奨学金借りて払うよ」

「涼くん、まゆと将来結婚するからいいって。あ、これ口止めされてるん

だった」

「そんなこと言ってたんだ……」

「ま。二人で暮らし出すし、なんとなくわかってたけど……別に父さんも気にしないから、仲良く暮らしたらいいわよ」

涼が両親に二人のことを話していたのは意外だった。おそらく学費の話でそうなったのだろうけれど……。

にしても、思っている以上に涼におんぶに抱っこな現実だ。

「はあ……いつまで経っても私だけお子様だなあ」

とぼとぼとマンションに帰る。

もしも別れたら、家族としての涼も失ってしまうんだ。

——あの巨乳の美人アナに勝ってるところが一つもない……。

まゆはネガティブ沼にハマっていた。